ラビドール かわら版

Vol.64

私の母は、90歳（要介護２）を一区切りとして、地元湘南の某市にある介護付有料老人ホームに入居しました。入居の決め手は、食事の美味しさとホーム内美容室でした。
母は自炊していましたが、美味しいものには目がなく、自分の髪も自慢で近所の美容院へ私の妻が付き添い、月に２～３回通い、髪を黒く染めて、シャンプー、カットなど美容師との会話も楽しんでいました。
ホーム入居後は、ホーム内美容室に定期的に通い、96歳の今は髪を栗色に染めています。
入居時は要介護２でしたが、食事・運動等から体調も良く、要介護１に改善され、家族も喜んでいましたが、今年の７月31日（月）にホームから連絡が入り、母の息がゼイゼイして苦しそうなので、医師の訪問診療を受けた結果、病院搬送を指示され、ホームスタッフが付き添い入院になりました。
入院後は、酸素療法や利尿剤でむくみの治療などの効果があり、８月４日（金）に退院予定と連絡がありましたが、当日の朝に母の状態が急変し、担当の医師から心拍数の低下、意識の混濁、ご家族の方に連絡を入れて下さいと指示され、長兄に連絡を入れ、妻にも病院へ向かうことを話し、私も急ぎ病院に駆けつけました。
病室では、ベッドサイドのモニター数値は低く、母の呼吸は浅いし、呼びかけにもまったく反応が無い状態で、医師からは終末期医療の説明を受け、長兄とも覚悟を決めました。
夜になり、病院側から一旦ご自宅へと促され、それぞれ自宅に戻りました。悶々と翌日の朝を迎え、病室に行ったところ母の目が開いており、私の呼びかけに声は出ませんでしたが、頷いて反応してくれました。
その後も予断を許さない状況は続きましたが、母の生命力は強く、一日一日と回復し、とろみを付けたお茶が飲めるようになり、９日目には、母の故郷である長野県小諸市の生家の話で盛り上がり「また小諸に行きたいね。」と、しっかり発語が出来ました。
そして、12日目の８月14日（月）に、普通の食事を完食出来るまで回復し、８月18日（金）に退院になり、リハビリ病院ではなくホームに戻れることになりました。
今号は、私的な事案を掲載して申し訳ございませんが、昨日まで元気だった方が、翌日には急変するという可能性を秘めているのが高齢者の特性と改めて再認識しました。
幸いにも、母は病院の医師・看護師の適切な治療によって元の生活に戻れることが出来ました。
これも介護付有料老人ホームのスタッフが、母の異変に素早く対応してくれたおかげです。
母の意識が戻り、少しずつ言葉が出るようになり、普通の会話が出来るまで回復できたのは、家族の呼びかけも大切なピースの一つと思っています。
高齢者の生活において、サポート体制が如何に重要か経験させていただきました。

一般財団法人　千代田健康開発事業団
介護付有料老人ホーム　ラビドール御宿
入居相談室　0120－122－602
（財団本部）東京入居相談室
0120－605－107